さらに討論深めよう
歩み始めた守る会運動
―校区連協議長会議報告から―

三池労組はとくに〝CO患者守る会〟運動をより積極化するためさる十一日校区連協（正しくは三池労組校区連絡協議会）の議長会議を開催、いろいろ話し合った。

執行部としては今後、CO映画の〝三池からの報告〟の上映運動を起こすとか、アンケートをとっては公害などに対する地域住民の要求をつかむなど、地域住民と苦楽を分かち合いながらCOの運動の拡大をはかる方針で、①地域住民の要求をひきだしそれを基礎に組織する。②公害・転業病・労仂災害撲滅の闘いを起こす。③三井の市民收奪の実態をバクロする。④外部との連帯を強める。⑤人間関係を深めるために文化行事レクレイションなどを行なうなどの活動を起こし、それと結び活動を広げていこうと呼びかけた。

こんどの議長会議で報告された各校区での活動も、すでに同じ方向ですすめられており、ある校区はCOヨーカンやボールペンの販売活動を通じてCOの実態を訴え、ある校区では活動家家庭への戸別訪問、ある校区では〝校区だより〟の発行、さらに手鎌校区では三十日に計画している〝三池からの報告〟の上映をめざし、地域分会の活動家が中心となりポスターやステッカーで、あるいは戸別訪問で住民に呼びかけ猛烈な運動に立ちあがっている。

しかし、この運動の前に横たわっている問題点も少くなく、次のような報告があった。

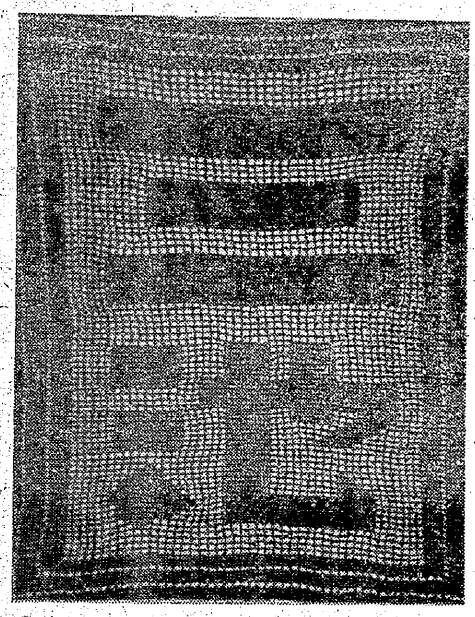
――話はわかるが、組合の指導取り組みはどうなっているのかとの疑問や、CO患者の表面ばかりを見て内面の実態を見ようとしない傾向が強い――CO患者の家族がもっと積極的に動かねば……の声が多い。――これまでの加入者は、呼びかけた人との人間関係を通じての人がほとんどで、それも患者を守るだけの二面じかとらえられていない弱さがある。

――守る会運動と校区協議会の運動は同じではないか、との意見がでているが、まだちゃんとした整理にまでいっていない。

守る会運動は歩みはじめたが、この運動をこれから本腰を入れ発展させていくことを目ざすとき、さらに討論を深める必要のあることを、こんどの議長会議は痛切に感じさせていた。

×

CO映画〝三池からの報告〟の上映活動が開始されました。各地域で積極的にとり組んでゆきましょう。



このほど、玉名地区労仂組合評議会の書記の佐藤文子さんから、三池労組へとしてレースで編んだ壁掛け（上の写真）が贈られてきました。佐藤さんご自身の手編で、それだけに真心のこもつたものほんとにありがとうございました。

CO守る会準備に
町田市から二人の青年

「CO患者を守る会」をつくるためには、まず現地にいき実態にふれなければと、このほど千葉県町田市から二人の青年が自費を出しあって三池労組を訪ずれた。

来組したのは守谷武さん（二十七才、社会党町田総支部オルグ）と山部照さん（二十一才、全逓労仂者）の二人で、いずれも町田市で四月に発足した「CO患者を守る会」準備会のメンバー。

この守る会は町田市の社会党の活発な活動の中から生まれ出ようとしている。守谷さんらが「社会新報」の配布活動をつづけている中で、たまたま同市在住の千二百名の仲間（叶久、池田、酒井さんら）と知りあい「その後CO患者はどうしているのですか？」と話しかけたのがきっかけになっている。

同情でない闘いを

二泊三日の三池での交流をおえた二人は、つぎのように語った。

「東京、三池とはなれていて、CO患者を守る運動をおこすということは、同情では絶対にダメです。あくまでも地域のなかで労仂者の権利をたたかいとるという運動をおこすなかで、CO問題と連帯をしていきたい」。

「三池で感じたことは、昭和三十八年以来同情でCO闘争が闘われてきたように感じます。あくまでも合理化の本質から闘いをおこさないと、地域には拡がらない。三池の力を過信すべきではない」

二人は三池の感想を出し合って大牟田をあとにしたが「CO守る会」のひろがりは日を追ってめざましい。写真は向つて左が守谷さん、右が山部さん。

茂尻を思えば心が重くなる
松尾家族会長の話

去月二日の大災害によって、十九人の仲間を資本の手によって殺され、二十二人の重軽傷（症）者を出した雄別茂尻炭鉱労仂組合（組合員千人、北海道赤平市字茂尻）に、三池労組は去月二十八日から今月の四日まで、谷端副組合長、久保主婦会長、溝口遺族会長、松尾CO患者家族の会会長の四人を、弔意を表するため派遣しよろこばれた。

はからずも右の弔問により殉職者遺族や重軽傷者のそのごの実態もハッキリしたが、現地をつぶさに見てきた松尾CO家族の会長はこのほど次のように語った。

「私たちはまだ悲しみの中に明けくれている遺族に会ってお悔みを申しあげたり、そこかしこの病院に入院中の患者の皆さんを見舞ったりすることができましたが、率直にいってそれらの人々の意識の中には、夫は合理化によって殺されたのだ、自分は資本の手で傷めつけられたのだというような、会社に対する労仂者階級としての憎しみといったものはなかったように思います。

これは予想外でしたけど、それも会社側のうまい労務政策によるものとわかりました。なぜなら、弔慰金は炭労協定にもとずく百三十万円のほかに、会社自らすすんで百四十万円パッと出していましたし、三十年の爆発の殉職者遺族など、これも会社がご主人さんが生前受けておられた賃金の八五%も与えて使っていまして、女子労仂者の賃金としては北海道第一といわれているほどでしたから。

重軽傷者に対しても、会社側は三井とは比べものにならないほど優遇していまして、CO中毒患者なんか出ていないということでしたが、しかし私自身の経験から、この人はどう見てもCO患者だが……と思われる人が、例の酸素欠乏症でかたずけられていたことを思いますと、心が重くてなりません。

その茂尻鉱も分離縮小などきびしい合理化をせまられていますから、「元気な人さえヤマをやめんならんとき、はたして未亡人や重軽傷者をこれまで通り会社がめんどう見てくれるかどうか」という不安が広がっていました。

一つの竪坑を中心に一つの町が展開し、その周囲を取り囲んだ丘の斜面にお粗末な炭鉱社宅がならんでいた風景は、忘れることができません。あそこの人々が一日も早く、ほんとうに労仂者として目覚めてくれることを祈っています」

生き返る転場新聞

三月二十二日～二十三日の二日間、転場新聞活動をすすめている私たちは泊りがけで、それを発展させるためにはどうするかについて話し合いました。それがよかったようで、各転場新聞が目を見はらかすようにいきいきとしてきました。ここに例をあげて紹介します。

坑口からも近く、空気もよく、電車も一時間に数回しか通らず作業も修繕程度で病気あがりの者にもやれるという、楽で安全な転場だった昭和二十六年にきまったものである。

いまはどうか。電車は一時間に二十数回も走り、そのたびにモウモウと粉塵が舞いあがり、けい肺にさえなりかねず、三十八年の大爆発では死亡二十九名、CO患者十六名をだし、無キズで助かったのは爆発寸前坑外に昇っていた者五名だけだった。

おまけに作業は過密ダイヤのあい間を縫って、以前はやったこともない岩盤掘削作業、メッセンジャーワイヤーとトロリー線特電ケーブルなど複雑化した中での枠補修。片時の油断もならず心身ともに緊張の連続。

その上闘争前上下一厘（六～八円）だった合建は、いまや上下八十円もの差をつけ、労仂者を分裂させている。

新賃金展開を契機に合建をやめさせ、生活できる賃金をとるためいまからたちあがろう」

素晴らしいが、この〝まくらぎ〟は号数もなく発行日付けもなく、果していつ生まれて幾つになったのやらすべて不明。

本線修繕の賃金は現状でよいのか？
―〝まくらぎ〟から―

三川七分会の〝まくらぎ〟は、「本線修繕の賃金は現状でよいのか」と次のように訴えています。

「全国最低の炭鉱賃金のそのまた最低の賃金が保線の賃金だ。この非現実的な賃金は、保線がによれば、同分会は昨年四月本層三十六卸右四片で作所中、鉱車逸走により転場に果して帰れるかわからない重傷を負い、現在八代労災病院で療養中の仲間―坂本俊雄さんを見舞うため、同紙を通じてカンパを訴えました（13号で）ところ、一万五百十四円が集まりました。

それをもって分会代表の二人が去月二十日坂本さんを見舞い暖い激励をおくった記事がありました

坂本さんはそのとき「能率はあとまわし、まず体を守ること」と強調されたそうで、記事は最後に「殺人合理化を粉砕するため頑張ろう」と訴えていますが、心をうたれた記事でした。

×

マンガは港務第四分会の〝はぐるま〟が、連載しはじめたものです。ねばり強くがんばりましょう

カンパ訴える
三川七分会〝あせ〟
三川七分会の〝あせ〟（14号）

さつき展
宮浦園芸部で

▼…このほど宮浦指導部の広間でさつきの盆栽の展示会があり、とかくかねてはいろどりの少ない部屋にさわやかの初夏の風を吹きこんでいた。

もちろん、これは宮浦園芸部（会長は伊藤義光さん＝48才＝で、会員は四十二名）の部員たちがもちよったもので出展点数は四十数鉢。仂く者の目を楽しませている。